

# 静岡大学 理学部 同窓会会報

NO.12

発行所  
静岡大学理学部同窓会  
静岡市大谷836  
静岡大学理学部内  
Tel 054-237-1111(代)  
会長 赤池大樹

## 理学部の前進

理学部長 福島邦雄



理学部同窓会の皆様方には、益々御発展、御活躍のこととお慶び申し上げます。この数年計画を立て、平成八年度概算要求として文部省に要求して参りました

理学部の学科改組計画並びに大学院改組による大学院博士課程の設置計画が認められて、平成八年四月一日から理学部は新体制となり、新しい博士課程の大学院も誕生することになりました。先ず、学科改組についてありますが、現在の小講座構成の五学科が改組され、大講座から構成される、数学科(基礎数理論座、数理解析講座、学生定員四十名)で発足、臨増分返還後三十五名、物理学科(基礎物理

の理学研究科と工学研究科がなくなり、新たに、静岡大学大学院博士課程理工学研究科が誕生します。この大学院は、博士前期課程と博士後期課程とから成り、前者は、数学、物理学、化学、生物地球環境科学の四専攻(学生定員七十名)及び計算機工学、機械工学、物質工学、システム工学、電気・電子工学の五専攻(学生定員百五十名)で構成され、後者は、環境科学、設計科学、物質科学、システム科学の四専攻(学生定員二十九名)から構成されます。この新大学院は、社会人・留学生の積極的な受け入れをも特長とし、人間の快適な生存と自然界との共生を求める、人間と自然に優しい科学技術の構築を目指すものであります。

このような理学部の前進によって、今後は、より充実した教育・研究を進展させ、先端科学技術の発展にも大きく貢献出来ることになりそうです。一方、静岡大学としても、平成十一年に、輝かしい区切りの年、創立五十周年を迎えようとしております。静岡大学に五十年間の重厚な歴史が築かれるこの年を、同窓会の皆様方と共に慶び、祝いたいと思っております。現在静岡大学では、「創立五十周年記念事業企画委員会」を設置して、全学の意見を聴き、事業計画を具体化しつつありますが、同時に同窓会の御意見をもうかがいつつ、五十年の歴史にふさわしい内容のある立派な記念事業が出来るよう準備体制に入っております。同窓会にも御協力をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

最後に、皆様と共に今後益々の理学部の発展を願いたいと思っております。窓外に見る富士山の美しさは、激動の時代を迎えても変わりません。当教室の研究状況その一を平成五年に記して以来三年経過したこととなり、その間、特色と魅力のある教室づくりを目指すなど随分様変わり致しました。



とって、基盤を据えていかなければならない責務は大きなものがあるだけに、更なる飛躍をしたいと同決意を新たにしております。最近の生物学の研究は、研究分野をジャンル分けすることが殆ど無意味に思われるように、目的も手法も相互にオーバーラップしております。既存の学問分野にとらわれない分野を越えた研究が求められています。今回は、前回(同窓会

と機能の免疫細胞化学ならびに電子顕微鏡による解析。竹内浩昭研究室・動物の本能行動(生得的行動)の発現機構に関する神経行動学的研究。徳元俊伸研究室・魚類・両生類の卵母細胞をモデル系とした細胞周期制御機構の分子メカニズムの生化学・分子生物学的手法を用いた解析。



私は昨年の十二月で、満五十歳になりました。やっとうといよりは、もうとうい思いです。一昔前までは人生五十年でした。子供の成長半ばで、人生を閉じたのですが、今や人生八十年、マラソンにたとえるならば、折り返し点を少し過ぎたところ、一番苦しいときだと思えます。まさに仕事は中間管理職、子供は大学生でまだまだ金がかかります。

## 人生の折り返し点を回って

会長 赤池大樹

の加藤さんたち一回生に呼びかけて何回か同窓会設立に向けての準備会を持ち、八月に何とか設立総会を開くことができました。その後、名簿の管理を主な活動としてきましたが、当時はパソコンもなく、二人近くの封筒の宛名を十人ほど

で八時間余りをかけて手書きで行いました。今ではあんなことをよくやれたなあと感じますが、これもやる気と若さゆえだったと思います。あれから十二年、今ではパソコンで名簿の管理をしています。作業の点で

は大分楽になったはずですが、機械化されたからといって、必ずしも生活にゆとりができたとは思えません。考えてみますと、現代の生活も同じことが言えるのではないのでしょうか。昭和三十年代の後半の高校生であったころは、電話やテレ

ビはまだまだ普及しておらず、車もほとんどありませんでした。手紙をやりとりし、ラジオを聞き、バスや汽車で出かけました。それが四十年代に入りますと、急に世の中が変わり始め、生活様式が変化したしまし

た。このような社会の変化に、日本人みんながお金を求めて、大都市へ出て働くようになり、家庭を顧みず子供は鍵っ子となり、おやつや弁当もお金で与えるようになってしまいました。大人は、機械化された社会に振り回され、子供は愛情

## 最近の生物学教室の研究状況(その2)



石川勝利

報九号、平成五年三月二十日発行)紹介した研究室(石川、野口、山田、塩尻及び山内研究室)を除いた研究室の研究状況を新しいスタッフも含め動物系と植物系グループに分けて御紹介致します。

(動物系研究グループ) 太田吉彦研究室・下等脊椎動物の視床下部・脳下垂体・神経内分泌系を構成する神経細胞・内分泌細胞の構造と機能の免疫細胞化学ならびに電子顕微鏡による解析。竹内浩昭研究室・動物の本能行動(生得的行動)の発現機構に関する神経行動学的研究。徳元俊伸研究室・魚類・両生類の卵母細胞をモデル系とした細胞周期制御機構の分子メカニズムの生化学・分子生物学的手法を用いた解析。

(植物系研究グループ) 米田芳秋研究室(三月末で停年御退官)・ヒルガオ科、特にアサガオ属植物及び種間雑種についての遺伝分析と系統保存、植物培養細胞、組織の分化の機構。増沢武弘研究室・高山・亜高山帯ならびに極地・乾燥地に生育する植物における極限環境適応現象の生理生態学的研究。塩井祐三研究室・光合成器官の形成及び老化の解明・高等植物及び光合成細菌の光捕集機能素子クロロフィルの合成及び分解機構の生理生化学解析。調子昭一研究室・植物の組織培養技術を用いた植物の進化過程についての解析。

丑丸敬史研究室・環境ストレス(低温・高温・乾燥・紫外線・重金属等)に対する植物の応答機構の生理生化学・分子生物学解析。

# 職場紹介

## 税理士 知久正博

はじめましてという方にも、お久しぶりでという方にも、変わった同窓の仲間がいるものだと思うれるかもしれませんが、およろしく理学部とは縁のない税理士という肩書きが私の職業でございます。最近では文科系の学生諸君には結構人気のある資格と伺っておりますが、私が学生の頃は、その存在すらほとんど認識されておらず、私自身も公認会計士は知っておりましたが税理士など意識のかけらもありませんでした。

理学部の化学科卒業といってもセンスのかけらもなく、専攻を間違ったと思っておりますので、化学会社のコンピュータ部門に就職し、ここで技術計算担当として活躍するつもりでした。しかしコンピュータのセンスもなく次第に平凡なサラリーマンとして夢も希望も失いかけていたところ、妻が出産のため実家へ帰りまして、ひとり寂しく物思いに耽るなか次第に将来への不安が大きく膨らんでいきました。資格をとって独立しようとしたとき決心をしました。しかし、妻もいれば子供も生まれる。仕事をしながら無理なく取れる資格はないかと調べたら、これが税理士だったというわけです。このとき二十七歳、それから合格まで三年、週二回ほど夜間の専門学校に通い、一年目に簿記論と財務諸表論、二年目に相続税、三年目に法人税と固定資産税と合格し晴れて税理士の資格がとれました。

資格がとれてから静岡に戻って来ましたが、五年半の修行を経て独立し、それから約十二年、お陰様で私を含め十人を抱える会計事務所となりました。

言うまでもなく税の専門家としての仕事は基本です。得意先は中小企業で業種は問いません。毎月帳簿の監査をし、年に一度の決算を経て税金の申告書を作成します。会社の場合は法人税、個人事業の場合は所得税になります。最近はこのように税に関することだけでなく、経営に関するアドバイス、経営計画書の作成の指導、朝礼や会議の指導、社員教育等幅広くやっています。このようなコンサルタント業務が大変重視されつつあります。

単発ではありませんが相続税の相談や申告会社設立の相談等も重要な業務です。中小企業の経営者は相談相手がいないので、色々な問題を相談に来ます。早く言えばよろず相談屋のようなものですが、何でも相談に乗ってあげることが税理士業務のバックボーンであり、頼りにされるのが私の生きがいのような気がします。

回りは道はしましたが、今の仕事に大変満足していますし、自分にピッタリの仕事と思っております。家内も同じ理学部の化学科の同級生ですが、事務所の一員として頑張っています。仕事の違いですが、疎遠になりがちですが、いつでも同窓生としてお付き合い願います。

昭和四十七年化学科卒業

### 花の係長

数学科 萩原 忠

「教員でない方に」ということで原稿の依頼を受けたので、私の仕事に関しての、近況報告をします。

私は自動車関係の会社に勤務している。だんだんと責任のある立場になってきて、最近では気の重くなることも多い。新車の開発と言え、短い開発期間と与えられたコスト内で、他社競合車種と同等以上の車を作り上げなければいけない。

入社した頃は、与えられた仕事をこなしていればよかった。しかし入社して十三年もたれば、係長という肩書きをもらい、部下も何人かつく、そして今までは逆に、効率よく仕事が進むように業務計画を立て、部下に指示を与えなければならぬ。仕事はうまくいって当り前で、生産が近づいても問題をかかえたままだと、「何をやっつとるだ！」と、直属の上司はもとより、さらには上からお小言がやってくる。

社内的にも、社会的にも、これが我々の年代の役割なんだと、自分に言い聞かせ、頑張っているこの頃である。

(第十五回卒業)

**視野狭窄**  
物理学科 鈴木浩伸

昨年、理科学技術者の暴走という言葉がマスコミに踊った。記憶に新しいオウム事件である。優秀な技術者だからといってよき社会人ではない。技術者は視野狭窄だなどとまことしやかにいわれた。

私は現在物理学とは全く縁のない一般行政職として静岡県に採用されたため、いわゆる事務方の人間として

様々な技術系の人々と仕事をしは別として確かに視点というか思考の原点が違うように感じる。しかし同時にその相違がとても大切なもののようにも感じる。

その道一筋のイチローにしろ羽生にしろ、彼等を生み出したのはその世界を支える多くの理解者であり、また恵まれた環境であった。もしこういう条件が技術者の世界にもあったら、かの事件もなかっただろうし、技術立国としてもっと国民に自信と夢を与えていたのだからと思う。この点でいえば真に視野狭窄にあつたのは技術者というより、目先の利益に走った側にあると思えるのだが。

(第十七回卒業)

## 同窓生の窓

オールドな同窓生

**化学科 赤星順一**

年賀状を書こうと同窓会名簿を取り出し見ていると、平成七年度で二十七回目の卒業生を送り出していることに今更ながら時の流れの速さを痛感してしまいます。

私は昭和四十七年卒のかなりオールドな同窓生で、多くの先輩がいます。また、驚きを感じています。また、二十数年前の友や先輩、恩師の懐かしい顔や声、そして姿が同窓会名簿の中に見え隠れしています。その中に昔の自分を見つけ、一人感慨にひたって筆を走らせています。

名簿で気が付くのは、静岡市に在住する同窓生が教員以外はあまりに少なく寂しいことです。多くの同窓生にと

り静岡は、青春の思い出を描いたスケッチブックなのでしょう。神奈川県出身でありながら静岡市役所に職を得た私にとって静岡は、スケッチブックの中の思い出の故郷ではなく、完成しつづめる作品なのです。

ところで市役所には理学部同窓生が私を含めて二名しかおりません。これは静岡が思い出だけの街で、人生の通過駅だからなのでしょう。理学部で学ぶ多くの若者に、二十一世紀の静岡に住んでいただきたいというのが私のささやかな願いです。

(第四回卒業)

**無題**  
生物学科 後藤昌英

生き物は、本当に奥が深いし不思議で面白い。最近特に強く思うことなです。現在浜松市内の高校に勤務しています。ともすると授業が受験のための講義になりかねないのですが、生徒たちが自然に興味を持つよう、実験や観察を多く取り入れていきます。大学時代あちこち歩き回ったことを思い出しながら

**美乃 95**  
地球科学科 藤浪美乃(旧姓天田)

結婚しました。昨年の春の静岡を離れ、現在は「せんべ

<b>収入の部</b>	円
前年度よりの繰越	2,098,118
年会費・寄付(6件)	29,000
終身会費(新入生179件)	1,790,000
終身会費(卒業生215件)	2,150,000
名簿代	12,000
受取り利息	25,368
<b>計</b>	<b>6,104,486</b>
<b>支出の部</b>	
印刷費	158,880
通信費	449,120
会議費、事務用品費、払込手数料等	187,891
総会費	0
積立金(特別会計)	2,000,000
<b>計</b>	<b>2,795,891</b>
<b>差引残高</b>	<b>3,308,595</b>

以上報告致します。  
平成7年3月31日  
会計担当理事 浅野安久 野本正 杉金  
監査の結果、報告の通り相違ありません。  
監査 佐藤洋一 藤山初 松

### 事務局から

第四回総会を葉書にて代えさせていただきますが、報告いたします。

投票総数 四〇四票  
(数々、物産、化二〇生三、地三)  
議事一承認 三六 否認一  
議事二承認 三五 否認二  
無記入一七 以上

見慣れていた実家のテーブルが今となると料理が飛び出す魔法のテーブルに思え、薄汚れた二槽式洗濯機も、服を脱ぐだけで翌日には洗いがつてしまふ、スーパ全自動洗濯機に思えてくる今日この頃です。

結婚前の仕事は辞め、現在は週三日のアルバイトをしています。残業なし、昇給なしのフリーターとはいえず、コンクリートジャングルを彩る若き？OLには気苦労も多く、ブルーな気分が家を出る事もあります。そんな時、通勤電車の中から見える富士山が心を癒してくれます。

隣駅までのほんの数分間だけ、特徴的な台形の山影が姿を現すのです。見慣れていた故郷のシンボルがこんな所にまで顔をのぞかせてくれると、応援されているように嬉しくなります。これからの人生の背景にいつもあろう富士山の、今までもちよっと小さくなった姿を眺めながら、私の第二の人生はスタートしたのでした。

一九九九年六月一日が創立五〇周年の日であり、一九九六年から一九九九年にかけて、二十一世紀に向けて記念事業を実施したいとの意向でした。静岡大学を情報発信の基地にしたいという思いが有り、記念事業の内容は次の観点から実施したいとのことでした。

- 一、地域社会に於ける存在感の確立。
- 二、静岡大学のマンパワーの開花をめざす。
- 三、地域サービスの実行。

これからも、細部について話し合いが持たれると思いますが、理学部同窓会としては、大学からの要請があれば出来ることには協力を惜しまない、という態度で望むつもりです。

記念誌の予約販売は同窓会で予約注文を取ることになろうかと思いますが、その節には、よろしく願いいたします。

現在、同窓生五四〇〇名、住所が分かっている者三九〇〇名です。